巻　頭　言

Change

市立札幌病院　佐久間　　隆

アメリカ大統領に選出されたバラク・オバマが選挙演説中に頻繁に使った change が流行語になっている．我々の周辺の change について綴ってみた．

橈骨遠位端骨折の治療は，最近であれば掌側から locking plate が用いられ，良好な結果が得られるようになった．数年前までギプスで治療していた骨折型でも手術的に，しかも経皮ピンニングではなくプレート固定をするようになった．近い将来，ギプス治療がなくなるのではと思うほどの変化である．

高齢者に多発する大腿骨近位部骨折の治療はインプラントの開発により早期離床が可能になったが，受傷から手術までの期間も短くなっている．『整形外科手術は急がないから全身状態を充分把握して・・』ではなくなった．しかし，治療後の生活環境は整形外科医が関与せず，ケースワーカーや介護保険など，過去にはなかった部門の協力を仰ぐことになる．これからは，人口構成，都市の構造，経済事情など，我々が議論しても及ばぬ社会構造の変化で治療方法も変わってくる可能性があると思う．

先人のやり方を批判していた世代がいつの間にか年老いて昔のことを語り始める頃，若い世代が新しい治療法や分類を紹介して，治療戦略と称して新たなうねりを作る．若い世代は年長者，先輩を見ていて，もどかしさを感じるのかもしれない．世代交代は良いことだと思うが，いつもうまく行くとは限らない．医療資源，この場合，医療費には限りあり，どこかで制限されるかもしれないが，より効果的，効率的で良心的な医療を目指したいものである．

巻頭言は代々，国内の著名な，あるいは高い業績を持った先生にお願いしてきたが，代表の引き継ぎ，本研究会の今後の進化を予告する目的で，記念すべき25巻に自らの拙文を掲載させていただいた．老舗の“外傷研”は年２回開催し，道内各地で骨折治療に熱心な整形外科医が参加してきた．会の歴史について，荒川浩前代表に特別投稿していただいた．本研究会は今後，評議員が中心となり外傷の systematic な治療の啓蒙，若手の教育などにも力を注ぐ工夫をしている．今後の change に期待して頂きたい．